

## 訳者後記

本書は、二〇〇五年に出版された *Life Before Life* (New York: St. Martin's Press) の邦訳です。著者は、生まれ変わり型事例研究の第一人者であるヴァージニア大学人格研究室イアン・ステイヴンソン教授の衣鉢を継ぐ、児童精神科医のジム・タッカー（以下、著者）です。児童精神科医ですから、子どもを対象にした調査研究には最適と言えるでしょう。本書の「まえがき」を見ると、ステイヴンソンが著者にいかに厚い信頼を寄せているかがわかります。ステイヴンソンは根っからの研究者なので、『前世を記憶する子どもたち』（邦訳、日本教文社）や『生まれ変わりの刻印』（邦訳、春秋社）のような一般向けの本を書いても、専門家としての姿勢を崩すことはありませんでした。その点、著者は違っていて、ステイヴンソンが長年月をかけて集めた、あるいは共同研究者とともに自ら集めたデータおよびその意味を、一般読者の視線に立って、ていねいに噛み砕いて説明しています。事例そのものも、多くは非常に興味深いものです。

### 本書の特徴

本書の特徴は、他にもいくつかあります。ひとつは、これまであまり公開されなかったのないアメリカの子ども事例を、主として著者が独自に調査した中からたくさん紹介していることです。前世の人格の予

言に始まる生まれ変わりの過程は、国や文化圏によってかなり違っているようです。具体的には、予告夢や性転換例、同一家族例、「幕間記憶」の発生率など、前世の人格が死亡してから現世に生まれ変わるまでの過程に内在する要素が、それぞれ異なるわけです。たとえば、ヨーロッパの事例（ステイヴンソン、二〇〇五年）もそうですが、本書を見ると、アメリカの事例でも同一家族例が圧倒的に多いことがわかります。ところが、たとえばスリランカには同一家族例がほとんどありません。それは、その国や文化圏が持つ習慣や伝承や信仰などに従う形で、生まれ変わりが起こりやすいためのものかもしれません。<sup>（註1）</sup> そうすると、生まれ変わりが事実であれば、人間の心は、生まれ変わるまでの間隔や来世の性別や場所などを、ある程度の幅の中ではあっても、自覚の有無はともかくとして、多少なりとも恣意的に選択していることになるでしょう。それにより人間の多様性はつきりしますが、そればかりではありません。人間の心がいかに大きな力を持つているかということも、同時に明らかになるのです。

第二点は、前世で死亡してから現世で生まれるまでの幕間記憶について、一般向けの著書で初めて真正面から取りあげたことです（本書第8章）。そもそも前世の記憶を持って生まれてくる子どもは、世界的に見てきわめて稀なわけですが、前世の記憶を持っている子どもの中で幕間記憶を持っている子どもは、さらにその五分の程度にすぎないということです。前世で死亡してから母親の胎内に入るまでの間に、臨死体験でよく知られている、「天国」のようなところに行く人たちと、死亡した付近にそのまま留まる人たちがいるそうです。後者は、いわゆる「浮かばれない霊」として知られる存在に似ています。現世から見ると、前世で起こった出来事よりも、死後に起こった出来事のほうが時間的に近いわけですが、にもかかわらずそのような結果になるのは、なぜなのでしょう。また、奇妙なことに、幸福な出来事や状況を中心にした前世の記憶はほとんどないようですが、そのこととともに、この事実は実に不思議です。

第三点は、生まれ変わりが持つ意味について検討していることです（本書第10章の「霊的な推測」）。この

点については、ステイヴンソンも詳しく検討しています（『前世を記憶する子どもたち』第10章の「個人の責任対運命の偶然」）が、ステイヴンソンは反省を通じて人格を成長させることについて主に論じているのに対して、著者はさらに進んで、それぞれの人生には目的があるのかもしれないという推測をしています。これは、宗教では一般に言われていることですが、科学的な本としては初めての記述ではないでしょうか。

第四点は、生まれ変わり問題に関するさまざまな可能性や批判を、随所で、できる限り中立的な立場から厳密に検討していることです。詐欺的行為や記憶錯誤によるものではないか、偶然の一致による錯覚なのではないかなどの、いわゆる懐疑論者の批判に対して、一般読者にもわかりやすい反論や反証を行なった著書は、これまであまりなかったでしょう。批判というものが意味を持つためには、批判された相手がそれによって影響を受けざるをえないものでなければなりません。そのためには、単なる揶揄やげや揚げ足取りではなく、真摯な態度で批判をしているかどうかが問題になります。しかし、身内みうちからのものを別にすれば、前世の記憶とされるものを含めた超常現象の研究に対して、真摯な批判はこれまでほとんど

註1 この問題については、ステイヴンソンが詳細に検討しています（ステイヴンソン、一九九〇年、二六一—二七一ページ）。

註2 ステイヴンソンは、本書でも紹介されている一九六〇年の論文で、江戸時代に平田篤胤が調べた「勝五郎」の事例を、科学的に厳密に調べられているからか、第一例として取りあげています。そのような事例があるためなのでしょうが、ステイヴンソンは、日本でも探せば簡単に事例が見つかるはずだと考えていて、事例の発掘を記者にも強く勧めたことがあります。しかし、現実にはそう簡単ではないようです。生まれ変わりに強い関心を寄せていた故遠藤周作氏は、朝日新聞に連載していた「万華鏡」というコラムで事例を募集したことがあります。ところが、遠藤氏から聞いたところでは、読者からの反応は全くなかったそうです。日本の事例では、勝五郎はおそらく例外中の例外で、意識的な記憶が中心になっている事例はほとんどなく、前世を記憶する子どももの事例があるとすれば、行動や関心や感情などの非意識的な記憶が中心になっていないかと思われま

行なわれてきませんでした。懐疑論者の批判に品性が低いものが圧倒的に多いのも、顕著な特徴です。

真摯な批判であれば、自らの論理や根拠のまちがいを認めざるをえなくなつた側は、それを真剣に受け止める必要があります。ところが、超常現象の研究者は自分にまちがいがあつた場合、それを改めても、そのように誠実な態度をとつた批判者は、これまでほとんどいないのです。黙つていられないために、きちんとした知識を身につけることもほとんどせず、無知のままやみくもに否定しようとするだけで、「納得」したり自分で研究したりすることはまずありませんし、論争に負けても、それまでの主張をひたすら繰り返すか逃げ去るかするだけなのです。しかも、超常現象にまつわる「論争」は、既に一〇〇年以上も膠着状態のまま、ほとんど進展がないのです（笠原、一九八七年、一九九三年、二〇〇〇年）。アメリカの進化論論争を別にすれば、そのような科学分野は他には存在しないでしょう。本書第9章でもふれられている通り、超常現象は現在の科学知識一般と「合致」しません。以上の事実は、生まれ変わりを含めた超常現象が、現在の科学知識とは質的に違つたものである可能性を示唆しています。

### 超常現象と日本の科学者

現在の日本は、テレビの人気番組や関連図書を通じて、「前世ブーム」だそうです。また、日本独自の現象なのでしようが、生まれ変わりを中心に据えた「生きがい論」も、驚くほどの人気を博し、それを医療に応用する医師も出てきています。特に「前世療法」について書かれた本は、翻訳書を中心にかなりの売れ行きが続いており、この方法を治療法として使う医師や心理臨床家も実際に登場しています。治療法として使つて効果があるのなら、それはそれでかまわないでしょう。しかし、症状はいろいろな理由で消えるので、「前世」の出来事を催眠状態で思い出したことによつて症状が好転したとしても、その「出来事」

が本当にあったことの証明になるわけではありません。本書でも何例か紹介されていますが、前世の死因を記憶しているのに、それに関係する恐怖症を持っている子どもが非常に多いのです。この問題について、ステイヴンソンは、催眠の専門誌に論文 (Stevenson, 1994) を寄稿することまでしています。

それに対して、科学の世界では様子が全く違っています。人間の心は脳の活動の結果にすぎないという考えかたこそが「科学的」だと信じられているため、「科学的」に考えると、生まれ変わりなどはそもそもありえないという、最初から決まりきった「結論」に到達するわけです。しかしながら、「人間の心は脳の活動の結果にすぎない」という考えかた自体は、科学的方法を使って証明されているわけではありません（ペルクソン、一九九二年、九七ページ）。現代の科学者が共有している一種の信仰にすぎないのです。その点は、本書の第9章で俎上に載せられている「さまざまなる反論」を見るとはつきりするでしょう。

日本では、この考えかたが、そのまま心理学や医学の専門誌の暗黙の編集方針になっていますから、仮に超常現象を扱った論文を投稿しても、臨死体験のようにさまざまなる解釈が可能な体験の調査報告を除けば、それが掲載されることはありません<sup>註5</sup>でしょう。しかし、科学技術を科学と取り違えている人たちの

註3 論争の結果ではありませんが、行動療法を創始したイギリスの著名な心理学者ハンス・アイゼンクが実例としてあげられます。アイゼンクは、従来から超常現象に強い関心を示していたのですが、死後存続問題についてはかなり批判的だったのです。ところが、晩年に執筆した共著 (Eysenck & Sargent, 1993, pp. 169-173) の中では、ステイヴンソンたちの研究を積極的に評価する態度に変わっています。

註4 いわゆる懐疑論者たちの奇妙な論理に関心のある方は、拙編書『サイの戦場——超心理学論争全史』（平凡社）をご覧ください。懐疑論者たちが見せてくれる言動は、超常現象に対する心理的抵抗の研究に、さらには人間の本質の研究に、きわめて貴重なデータを豊富に提供してくれるはず。

註5 ただし、『日本医事新報』という医師向けの週刊誌に、私たちの研究グループが行なった念力の研究（郡一九八八年）の一端が掲載されたことがあります。

多い日本とは違って、科学の本来的な意味がよく理解されているアメリカや英国では、“反骨精神”のあつる医学雑誌や心理学雑誌の編集者は、生まれ変わりなどの超常現象を扱つた論文でも、それが一定の基準を満たしたものでなければなりません。たとえば本書巻末の参考文献を見て、『内科学紀要 *Annals of Internal Medicine*』や『神経・精神病学雑誌 *Journal of Nervous and Mental Disease*』といった長い伝統を持つ超一流誌が、生まれ変わりや遠隔治療の先鋭的論文を繰り返し掲載している事実がわかります。ステイヴンソンが嘆く（シユローダー、二〇〇二年、三三〇ページ）ように、この方面の研究が主流になることはないにせよ、アメリカや英国では、一般の内科医や精神科医にも、そうした論文を見る機会が時おり与えられるということです。しかし、英文の論文を読む習慣がほとんどない日本の専門家たちには、その機会が全くありません。この格差は、科学に対する考えかたが、日本と英米の科学者では決定的に違うことを明確に示しています。科学とは、科学的方法を使つた真理の探究のほうなのですが、現実には必ずしもそうではありません。そのことを端的に教えてくれるのが、超常現象にまつわる研究やそれに対する奇妙な批判なのです。超常現象が一般の科学者に受け入れられないのは、本書の第9章でも述べられている通り、科学者が保守的なためとされることが多いようです。しかし、本当にそうなのでしょうか。単なる保守的姿勢ということであれば、利害関係にとらわれない科学者もいるはずですし、世代が変わつて「パラダイム」の変革が起こつてもいいはずでしょう。しかし、その状況が一〇〇年以上も変わらないのは、なぜなのでしょうか。

いずれにせよ、ステイヴンソンが先鞭をつけた前世記憶の調査研究が、第二世代とも言うべき著者に継承されたことは、超常現象の研究が世界的に地盤沈下を起こしている現在、かなりの朗報と言えるでしょう。そのような意味からも、本書を味読していただければ、訳者としてそれにまさる喜びはありません。

二〇〇六年八月一日

笠原敏雄

参考文献

- I・ステイーヴンソン（一九九〇年）『前世を記憶する子どもたち』、笠原敏雄訳、日本教文社  
 笠原敏雄編（一九八七年）『サイの戦場——超心理学論争全史』、平凡社  
 笠原敏雄編（一九九三年）『超常現象のとらえにくさ』、春秋社  
 笠原敏雄（一九九五年）『隠された心の力——唯物論という幻想』、春秋社  
 笠原敏雄（二〇〇〇年）『超心理学読本』講談社プラスα文庫  
 郡暢茂他（一九八八年）「念力現象実験下における精神生理学的変化」『日本医事新報』第三三六五号、四五—四九  
 ページ  
 T・シュローダー（二〇〇二年）『前世を覚えている子どもたち』VOICE  
 H・ベルクソン（一九九二年）『精神のエネルギー』第三文明社  
 Eysenck, H.J, and Sargent, C. (1993). *Explaining the Unexplained: Mysteries of the Paranormal*. London: Pion.  
 Stevenson, I. (1994). A case of the psychotherapist's fallacy: Hypnotic regression to "previous lives." *American Journal of Clinical Hypnosis*, 36, 188-93.  
**〔記者略歴〕** 笠原敏雄（かさほら としお）——一九四七年生まれ。早稲田大学心理学科を卒業後、北海道や東京の病院で心因性疾患の心理療法を続け、九六年、東京都品川区に〈心の研究室〉を開設、現在に至る。著書に、『幸福否定の構造』（春秋社）、『希求の詩人・中原中也』（麗澤大学出版会）その他が、訳書に、『新版「あの世」からの帰還』、『続「あの世」からの帰還——新たなる真実・47名の臨死体験』、『前世を記憶する子どもたち』、『前世を記憶する子どもたち2——ヨーロッパの事例から』、『生まれ変わりの研究』（以上、日本教文社）、『臨死体験』、『生まれ変わりの刻印』、『前世の言葉を話す人々』（以上、春秋社）、『死後の生命』（TBSブリタニカ）、『心霊研究』（技術出版）その他がある。  
 連絡先 141-0031 品川区西五反田二一〇一八一五一四、心の研究室  
 電子メール kasahara@02.246.ne.jp ホームページ <http://www.02.246.ne.jp/~kasahara/>